

# 藤の虻ときどき空くうを流れけり

藤田湘子

誰しも自分の名前の漢字が入ったモノには、少なからず興味や共感が湧くのではなからうか。桜が終わると藤の花が咲く。白花もあるが、やはり淡い青味の紫、藤色の花が際立って美しい。平安貴族、藤原氏の印象からより高貴な色として伝えられたからに他ならない。

藤の花の蜜を求め、虻や蜂や様々な昆虫が集まってくる。やや嫌われ者の虻も、この時ばかりは花に出入りする姿が少し滑稽で好ましく、観察してみようかと思わせられてしまうから不思議である。

大きな熊蜂は、花の周辺で時々見事なホバリング（空中停止）を見せ、やや小さい虻たちは花を目掛けて一直線に飛び来たり、また飛び去る。

1984年（S59.05.06作）第七句集『去来の花』 鑑賞・轍郁摩